

有島武郎全集

第七卷

大正十四年二月五日印刷
大正十四年二月十日發行

(非賣品)

著者 有島武郎

發行人 東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
足素一

印刷人 東京市神田區美土代町二丁目一番地
島連太郎

印刷所 東京市神田區美土代町二丁目一番地
三秀舍



有島武郎全集

第七卷

發行所

叢文閣

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地

電話牛込 二五七三番
振替口座東京 四二八八九番

有島武郎全集 第七卷

目次

ホヰットマンに對する一英國婦人の批評	一
マルクス女史の「女」に就いて	九
教育者の藝術的態度	一一
繰り返しの生活を憎む	一五
己れを主とするもの	一九
生活の歐化と文化生活	二三
言葉と文字	二七
描かれた花	二九
生命によつて書かれた文章	三九

目次

二

獨り行く者	四一
子供の素樸さ	四七
三大偉人の懺悔	四九
心に沁みる人々	五五
火事とボチ(童話)	六三
木曾山中	七九
新舊藝術の交渉	八一
上田博士の就任を機に漢字制限に就いての意見を徴されたのに答ふ	一一一
小作人への告別	一一五
文藝に就いて	一二一
愛に就いて	一三九
泉を創刊するにあたって	一八九
お断り	一九三
ドモ又の死	一九五
即實	二二九

道徳と道理	二四三
「静思」を読んで倉田氏に	二六三
酒狂	三三一
文化の末路	三四九
ワルト・ホキットマン	三六一
或る施療患者	三八七
斷橋	四一七
「ホキットマン詩集」第二輯を出すに當つて	四四五
永遠の叛逆	四四七
骨	四五三
詩への逸脱	四七九
腫なき眼	四八一
農村問題の歸結	四九一
農場開放顛末	四九五
親子	五〇一

目次

四

文化生活の基礎	五三七
藝術教育私見	五四一
農民文化といふこと	五四七
時評三つ	五五一
文化に就いて	五五七
獨斷者の會話	五六九
バルビュスの「クラルテ」の譯文を讀みて	六〇一
行詰れるブルジョア	六〇三

補遺

本學の過去	六一一
故田中稔氏に就いて	六一七
滿韓旅行と個人雜誌	六二一
題言	六二三
藝術的氣分に生きよ	六二五

創作上の危機に立つて	六二九
聖フランシス『完全の鏡』の序文	六三一
懸賞短篇小説に就いて	六三七
クロボトキンの印象と彼れの主義及び思想に就いて	六四一
「聖餐」に就いて	六四七
「御柱」上演に就いて	六四九
「御柱」の舞臺を觀て	六五三
「狩太共生農園記念碑」文	六五七
文化生活と個人生活の徹底	六五九
書簡	六六五
遺書	六七七

口 畫

著者肖像（一九二二年十一月）	（卷頭）
----------------	------

目次

「泉」創刊號表紙・……………(卷頭)

ホヰットマンに對する一英國婦人の批評

左に紹介するのは、アン・ギルクリスト夫人がホヰットマンの詩集を讀んで、一八六九年即ち詩人が五十歳の時に、感想としてウヰリアム・ロセッティに送つた書簡であります。ギルクリスト夫人はブレーク傳の著者なるアレキサンダア・ギルクリストの未亡人で、その時年齢が四十三年でありました。そしてホヰットマンを尊敬愛慕するの餘り、一時英國よりフィヤデルフィヤに移住して來たことのある人である。

この感想文は英國のある雑誌に發表されたもので、詩人がこれを讀んで、女性の書いた自分に關する批評中最も高貴なものであり、また恐らく總べての批評の中でも、最高位にある一つであらうと稱讃したものであります。今その中から大體を茲に紹介しませう。

..... 私は言葉といふものが、言葉でなくなり、電氣のやうな力強い流れに變り得るものだといふことを、この詩集を讀んで初めて發見しました。一體、私は强健な人間ですが、この詩集中の或る詩は、讀みこたへる力さへないと感じた位でした。例へば“Calamus”の中に含まれた種々の詩。例

へば「別れの歌」「大海からの聲」「涙」等には、重々しい感情と緊張した心の働きとがあつて、私の情緒はそれに堪へ得られない心持ちがします。暫らくは心が全く働かなくなるので、書物をそのまゝ目から遠ざけるのを餘儀なくされます。

また「自己の歌」その他そのタイプに屬する詩を讀むと、或は荒れ狂ふ嵐の海原を乗り廻はされ、高い山の峯から峯へと連れ廻はされるやうに感じられ、或は太陽の光に目も眩み、顔の集まりと聲の群がりとに氣も亂れて前後を忘れ、忘我の状態にさへ誘はれます。かと思ふと、他の種類の詩には、深い落ち着きを持つた智慧と、根深い思想とが籠められて居て、そこには楽しくなごやかな太陽の光があり、新らしくされ、力づけられた魂は、その光の中に柔かく抱かれるのを經驗します。生々した脈搏が、それ等の詩の中から流れ出て、生命の勇み跳る思ひをさせられます。そして懐かしくも、莊嚴な死の遠景を眺めさせられます。

この詩集を讀んで稱讃し、また共鳴しない者はないが、その形式の整はないのと、音律の缺けて居るのを非難する人はあります。けれどそれは非難する人がまだこの詩集の純粹の承認に達し得ないからであります。

素よりこの詩集中の總べての詩が、力と美とに於いて、同様な素晴らしさを持つて居るとは謂へますまいが、少なくともその總べては確かに生きてゐるのです。決して製造されたものではありません。

人は宮殿や寺院を批評することは出来ませうが、一つの森林を批評したところが、それが何になりませう。これまで人口に膾炙した傑作は、寧ろ氣高い建築物に比較さるべきものでせうか。丹青を凝らした爲めに價值を生

じた材料を以つて建て上げられ、法則と尺度との美に平行せしめ得る老練な手腕に依つて設計され、そして最初の石が置かれる前に、最後の石が何處に置かるべきかといふことまで打算せられた上に、出来上つた高尚な建築物の如きものだと言へます。その結果は如何にも堂々として、不可變です。然もそこには、あるべきものがない得なかつたやうな恨みがあつて、「こゝに批評の餘地が存在し得るのです」そしてそれは、それ自身のシンボルに對する息苦しい執着を以つて、誇りがに建つて、自然が獨り手に持つて居るあの無頓着な自由さの向うに廻はらうとします。

然しホキットマンの詩はさうしたものではありません。東から、西から、南から、北から、風によつて運ばれて來た種子が、永く地の下に横たはり、そして軀がて地の上に、「堂々たる建築物の如くに建ち上らずに」、大地の下に隠れて大地と同化し、大氣と光線と雨露とに依つて養はれて、地上に芽をふくに至るのです。

總べての枝、總べての葉は、それ自身の生命に依つて力と美とに生長します。しかもそこには、自然な生長と自由さがありますから、その結果は何としても變化さへなし得ないだけに自然です。「それ故、批評の餘地は、そこには生じ得ません」それは生長に充たされて居ます。即ち後から後からと生長して行くべき生命力で、その源を藏して居ます。

更らにそこにはおのづからなる音律が生じて來ます。それが生じないでは居られないやうに、恰もそこに或る大きな音律的な思想、或る時は嵐の如く荒々しく、或る時は探り得ざる程優しく、穏やかな感情、——さうした

ものが言葉に影響して、その言葉をも音楽的なものにして居ます。私はシラブルを計算することが、音楽の組み立てを明らかにし得る手段とは思ひません。この詩中に表現されて居る勢ひ強い自然さは、諧調の軀くびきに繋ぎ止められる爲めには餘りに自然だと思ひます。しかも私は、そこに或る種の音楽があることを確認します。それを聴き取り得ない耳と私の耳とを交換することは、代償を拂はれてもうべなふ氣にはなれません。

詩の女神は次ぎの二つの中、その一つをこの詩人に對して決定せねばならなくなつて居ます。即ちこの人を彼女の最高の完全な闡明者として許すか、彼女自身よりも更らに神聖な何物かがこの詩人の中にあることを認めて、この人のなすがまゝに任せ、嘗て現はれ出なかつた或るものをこの人によつて發見せしむべきか、この兩者の一を許す外にないと思ひます。

火を注いだやうな生命力に充たされた此の詩が、造り出された一つの偉大な源は、詩人が現在といふものの上に置いた強い破壊の力だと信じます。現實に對して恐れなく行き渡つた交渉を持つ所にあつたと信じます。從來の思想の先驅者は、「科學を除いては」残らずその目を思ひ切つて過去にのみ注いだ人々です。過去を以つて自分達の主君たらしめ、現在を賤しむ退け、既に大地の内に埋まり去つた過去の中にのみ偉大を見、偶々現在を語る中には、過去に對しての賤しむべき對象としてのみ現在を語り、そして現在に對して憐れむべき不信を抱くが故に、彼等自身が頻りに嘆いて居る無生命の状態を、生活の上に醸してゐます。何百年も過去の人間の目に燃え絶えて了つた火で暖たまれと私に命じます。死んだ人間の目を通じて物を見るか、さもなければ行き詰まつた暗黒

の中で、目を閉ぢて居ると命じます。そしてその詩人達は、薄暈けて了つた過去の美を喜んでゐますが、それはもう私を幸福にしてはくれません。

然しながらこの詩人、「豊富な言葉と喜びに満たされた力の人」なるこの詩人は、人の手を取つて眞直に前方に振り向かせてくれます。現在には彼れにとつて十分に偉大です。何故なら、彼れは現在にとつて十分に偉大だから。現在はこの詩人を通して大きな聲をあげつゝ、「宏大な大洋の潮」となつて流れます。この大地は既に老いて、彼女の生々としたチャームを失ひ去つたものではありません。その神々しい意味もなくなつては居ません。今でも素晴らしい男をも女をも産み出します。若し人が自分自身を信じ、その存在權を捨てないならば、その人はそのまゝ素晴らしい男であり、女であります。今迄現はれた如何なる人々よりも更らに豊かなる天賦を得たものです。何故なら、永い年月がその人の生まれ出るまでに容易ならざる準備をなし、過去から徐ろに現はれ來りつゝあつた、永遠の目的は、この人に於いて更らに新らしく展かれて來て居るからです。私達にこの事實を明示し得る人が終にワルト・ホビットマンに於いて現はれました。その人の歌は喜ばしく、強く、美しい生命の呼吸であり、その生命は現在といふものの賜ものに依つて、嘗て見られない程に高潮されて居ます。

私は嘗て幸福を無視するのは偉大な仕事だと考へ馴らされて居ました。幸福を輕んじ賤しめて、或る高い目的に向つて往進するのを偉大な事だと考へ馴らされて居ました。しかし私は今、幸福であり得る程偉大なものはどこにも無いといふことを知りました。「如何なることが湧き起らうとも、總べての瞬間に」幸福を掴み取ること、

輝かしい大空の下にあつて、寄せ返す波の穂に乘るやうに怒り狂ひ、脅やかし、荒れすさむ生活の波の中にありながら、快活に、心廣く、それを泳ぎ凌ぐ自分を見出だすこと、總べての不遇、失望の嵐の中から力強く跳り出することは、悲惨でもなければ、不幸でもなく、實に力を確得することであり、心の落ち着きを得ることであり、かかる幸福を得るに勝さつて偉大な何物もないのを知るに至りました。

或はカラマスの題下に集められた詩篇その他に於いて、男と男とが友情の戀に陷る。それは何を意味するでせう。人は嘗てそれを夢みるだにしたでせうか。これ等の *Comradeship* の福音の詩は、豫言的な洞察深い力を以つて、「崇高な、新らしい友情」即ちデモクラシーを語つて居ます。それは氣持ちの落ち着いた時に考へて見ると、實現し難い夢想として退けられねばならぬやうなそんな空虚なものではありません。それは詩人の胸の中に現在疼いてゐる呼吸であつて、彼れの周囲の男達に對して實行として、實現されて居る所のものです。

米國の民衆が奴隸の存續を主張して、母國の悲しみと憤りとを惹き起した時、その悲憤がこの詩人によつて如何に強烈に表現されたか。また彼れの國の寵兒なるこの詩人が力強い個性を投げ出して、國是の危機の犠牲となつた、何百何千何萬人に對して、夜となく晝となく、幾週も、幾箇月も、幾年も、看護と慰藉とのやさしい手を差し延ばしたかを知るものは、私の言ふ所を首肯するであります。

然しながら、現在は、容易に看取し得る偉大さと美との外に、種々なる他のものを私達の前に現はします。もしも詩人がこれ等のものに觸れないで、その解決を私達自身の力にのみ委ねて居るとしたら、彼れは人生の解決

者として不眞實であると謂はなければなりません、詩人は「偉大なる攝受や選擇や排斥を斥ける教」を高唱するのを忘れませんでした。もし彼れが、墮落、犯罪、無恥を見下すやうな憐愍を以つて見るばかりで、仲間づきあひの手を差し延べることをおそれて居たらどうでしたらう。然し彼れは、墮落した人、罪を犯した人、愚かな人、輕蔑される人が、「宇宙といふ人道の行進」に少しく歩み遅れた人々であり、「遅れながらも、彼等の道を聽がては歩み來る」人達であり、性急な人間の思はくと違つて、時には豊かな備へがあつて、その力の下には總べてのものがやがて完全に整へられるべきを信じてゐたが故に、彼れは侮蔑の感じを完全にその心から除き得て、同胞に對する不幸な考へ方から、自ら自身を見事に投げ出して居ます。

若し彼れが大膽に忠實に、自分の中にも光の絲と共に暗の絲が織り込まれて居るのを表明し、最惡のものの中にも最善の芽が含まれ、最善のものの中にも最惡の芽が潜んで居るのを申し出さなかつたならば、人類に對する同胞觀念は單なる美辭に過ぎなかつたでせう。若し詩人の心が、「限らない愛の大洋」でなかつたならば、彼れは私達が永く待ち望んで居たその人ではなかつたでせう。若しこの一事が缺けて居たなら、種々な不純な考へで汚がされて居るデモクラシーといふ言葉に、正しい意味を裹づけることは出來ますまい。

現在に對する非難から懷疑主義は生まれ出る。そして現在に對する博大な愛と承認とから信仰は生まれ出る。もし現在がそれ程偉大で、眞であるならば、過去の現在は偉大であつたし、未來の現在も亦偉大で、眞であらうと信ずるのは決して至難なことではないと思ひます。

有島武郎全集 第七卷

（一九三二年五月、學藝所載）

八